

< 講演録 >

京都大学基礎物理学研究所 研究会 複雑システムにおける創造的破壊現象の原理に迫る

日時 2015 年 8 月 7 日 (木) 10 : 30-11 : 10

場所 コープイン京都 202

座長 西 洋子 (東洋英和女学院大学・大学院人間科学研究科 教授)

講演 内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター 准教授)

幸福感・ソーシャルキャピタルの文化的基盤

内田●京都大学こころの未来研究センターの内田と申します。このたびは、複雑系科学未来創成学が立ちあがるということで、村瀬先生をはじめ、みなさま方に心よりお祝い申しあげます。お招きいただきましてありがとうございます。

◇スライド 1

きょうは、理系の先生が多いかなと思いますので、このような社会科学のテーマで恐縮ですが、ご意見をいただければ幸いです。よろしくお願いします。



京都大学 複雑系科学・未来創成学際シンポジウム
Aug 07, 2015

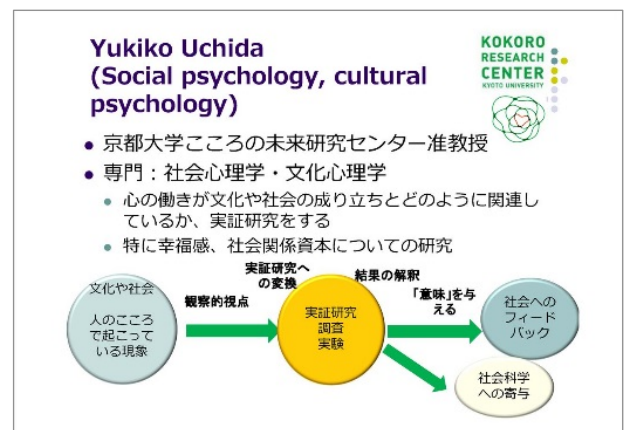
**幸福感・ソーシャルキャピタルの
文化的基盤
ー文化心理学からの検討ー**

内田 由紀子
(Yukiko Uchida)
京都大学こころの未来研究センター
Kokokor Research Center, Kyoto University

京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER - KYOTO UNIVERSITY
こころの未来研究センター

◇スライド 2「Yukiko Uchida」

私の専門は、社会心理学や文化心理学とよばれる領域のなかで、心の働きが文化や社会経験みたいなものを通じてどのように形成されるのかを実証的に研究しております。とくに社会調査あるいは実験研究などを通じて、文化や社会、人の心のなかあるいは人の心を取り巻く環境のなかで起こっていることについて検討して、フィードバックすることを考えています。



Yukiko Uchida
(Social psychology, cultural psychology)

● 京都大学こころの未来研究センター准教授
● 専門：社会心理学・文化心理学

- 心の働きが文化や社会の成り立ちとどのように関連しているか、実証研究をする
- 特に幸福感、社会関係資本についての研究

文化や社会
人のごころで起こっている現象

観察的視点

実証研究への変換

実証研究 調査 実験

結果の解釈

「意味」を与える

社会へのフィードバック

社会科学への寄与

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

◇スライド3「立場・考え方」

基本的には社会心理学者ですので、システムや組織、あるいは文化内で発生する心の働き自体に関心をもっています。これは実験や調査の手法を用いて研究を行なっているというスタンスです。いっぽうで、心の働きを支えるマクロ・メカニズムに対する関心をもっています。このマクロとマイクロの問題、この相応作用がいったいどうなっているのかを解決することが社会科学の大きなテーマではないかと考えています。

マクロでみようと思うと、社会学や現象学、歴史学など、さまざまな研究手法についての知識も必要ですし、これを実証的なところに落としここうとすると、こんどは認知科学であるとか、実験系の研究もしなければならない。まさにマクロとマイクロの接点なにある学門分野かなと思っています。

私自身の研究では、比較文化を主に行なってきました。とくにこの10年くらいは幸福感に関心をもって研究を進めてまいりました。幸福といいますと、「幸せになりたい」という気持ちであるとか、「お風呂に入って気持ちよい」とか、「きょうは、楽しくてウキウキする」とか、「明日の遠足が楽しみだな」というような、いわゆる主観的に感じる幸福ということですが、近年様々な領域でたいへん注目されております。

たとえば国についての豊かさを調べる指標としては、かつてはGDPであるとか経済指標がたくさん用いられてきました。あとで袖川芳之先生からお話があると思うのですが、経済的に豊かになったからといって、私たちがすぐに幸せだと感じられるのではないということが、ある種のパラドクスとして存在しているのです。

たとえば、私たちはお金持ちになりたいと思って、一所懸命に働くことがあります。お金を得たら、得た瞬間は嬉しい。しかし、いったんその状況に馴染んでしまうと、そうでもなくなってしまう。たとえば、ほしかった車を買ったとして、最初は楽しくて毎日のように磨くかもしれません。しかし、乗っているうちに、「この車があるから幸せだ」と毎日ではなかなか思えなくなるというのが人間の心情なのです。そう考えると、経済指標だけでなかなか私たちは幸福というものを推し量ることができない。

また、人間には物理的な欲求だけではなくて、所属欲求や社会的な地位に関する欲求もあります。人から賞賛されたい、あるいは人と仲良くしたい。こうしたことは、経済的な指標だけではなかなか測定することができません。とくに私は文化の問題に関心があるので、どのような文化環境のなかでは、なにが幸せとして定義されやすいかについて研究を重ねてきました。

立場・考え方



- 心理学者なので、システム・組織・文化内で発生する「心」の働き(認知や感情)をとらえる<実験・調査研究>
- 一方で心の働きを支えるマクロメカニズムに対する関心がある
- これらの相互作用を知ることが必要

◇スライド 4「文化と『幸福感』」

文化と「幸福観」 (内田・荻原, 2012 心理学評論)	
日本	北米
「おだかやかさ」	「うきうき」(Tsai et al., 2006)
良いことと悪いことのバランスの重視(負の内包、陰と陽)	良いことがさらなる幸福を招く、上昇的幸福(Ji et al., 2001)
関係志向	自己価値・自尊心 (Uchida et al., 2008; Uchida & Kitayama, 2009)
人並み志向・比較志向 (Hitokoto & Uchida, 2014)	自由選択

幸福な人物とは、若く健康で、よい教育を受けており、収入が良く、外食的・楽観的で、自尊心が高く、勤労意欲がある者...
(Myers & Diener, 1995)

これは日米だけの比較なので、ほんとうはもっといろいろな国の比較が背後にはあるのですが、代表的なところとして、日米比較の研究を挙げたいと思います。

どういうときにとくに幸せということばを使いやすいか、あるいは幸せという主観的な経験が起りやすいかということ、日記法みたいなものを用いて行なった研究があります。たとえば、iPhone などを持ち歩いて、ときどきポンと音がなると、そのときにどんな感情を感じているのかをネット上で解答する。そのときになにをしているのかも同時に解答する。そういう研究をした場合に、アメリカだと、ウキウキしているときに幸せだという感情を同時に感じやすい。

たとえば、彼女とデートに行くであるとか、いまからパーティに行くというときに幸せを感じやすい。これに対して日本人の解答、あるいはほかのアジア人、台湾人などの解答をみると、穏やかな感情を感じているときに同時に幸せを感じやすいことがわかっています。たとえばわかりやすい例でいえば、お風呂に入るときや寝る前ですね。

また、日本においてはよいことと悪いこととのバランスが重視されているので、たとえばよいことが 100%あるような状態を幸せだとあまり感じないという傾向が知られています。これは、理想の幸福状態を尋ねたときに、「100%の完璧な幸せを理想とする場合には 10 点とお答えください。幸せと嫌なことが半々ずつくらいある人生を理想だと思う人は、5 点とお答えください」。こういうことを聞きますと、だいたい何点とお答えになられますか。

回答者 ● 7 点。

内田 ● ありがとうございます。パーフェクトな日本的な解答でございます。だいたい平均すると 7.2 点くらいになります。7 点くらいがちょうどよい。つまり、70%くらいは幸

せでありたいのですが、3割くらいはまあまあなことがあっても構わない。この感覚はたいへんおもしろくて、理想なので100%といってもかまわないのです。でも、あまりそうはなりません。

あまりに幸せ過ぎるとすこし怖いであるとか、人生のなかで100%のなかに半々くらいよいことと悪いことがあるとすると、あまりによりことが続くと、「運を使い果たしてしまう」というような言い方を私たちはします。こういう心的モデルが存在していて、人生のなかによりことと悪いことが半分ずつくらいある。よいことばかりは続かない。だから悪いことが続けば、こんどはよいことが起こるかもしれない。あるいは、よいことばかりが続けば、運を使い果たしてしまうかもしれない。これはある種の観念として強く私たちに定着している可能性があるのではないかと考えています。

これに対して北米やヨーロッパでこの調査をしますと、10点と答える人もいれば、だいたい9点とか8点くらいが多いです。つまり日本の解答よりは、より100%の幸せを求めたってかまわないじゃないかとされている。こういうものが私たちのふだんの感情経験にじつは強い影響を及ぼしているのではないかということが私たちのもっている仮説です。

さらには幸福感を規定するものが、どちらかというと日本では関係志向的なものになっていて、たとえば人並みであることが強い安心感をもたらしてくれるのですが、北米ではやはり自尊心が強い幸福感の規定要因になっています。アメリカの幸福感に関する教科書をみますと、幸福な人物はどういう人物かという定義が書いてあります。幸福な人物とは、「若く健康でよい教育を受けており、収入がよく、外交的・楽観的で自尊心が高く、勤労意欲があって、みためもよければなおよし」みたいな、こういうことが書いてあるのです。これは日本的な感覚からいくと、こんな人はもしかしたら頭を打つのではないとか、昔は苦労したかもしれないとか、そういうストーリーを自動的に思い浮かべるとするのは、私たちの文化的な価値や経験が強く存在しているからではないかと考えられます。

◇スライド5「幸福のあり方と指標」

幸福のあり方と指標

- 幸福は**個人プロセスのみで決定されるわけではない**→
社会関係資本や、周囲の他者の幸福など、**社会的要素**
にも規定される (Uchida et al., 2014)
- 個人レベルの幸福を束ねた指標では考慮されない「**社会経済指標等**」の**マクロレベルでの変数**(主に客観指標で構成される)を組み込んだ指標作りの必要性
→ 客観指標と主観指標の双方が必要
- これらの幸福の要素が実質的に統合可能か、あるいは逆に統合しない方が多様な社会共創現象を捉えられるのかについて検討する必要

こうした主観的な経験に文化的な特性あるいは価値観が反映しているという考え方をみていきますと、幸福なあり方に関して考えるときに、マクロ要因とマイクロ要因（個人要因）をどのように結合させるのかが私たちのいちばん大きな課題になっています。というのも、さまざまな国で幸福度の指標をつくりましょうということが盛んになっています。2010年から2013年に日本においても、内閣府で幸福度に関する研究会が立ちあがりまして、私もその委員のメンバーを務めていたことがあります。

日本の幸福の指標をつくりましょう。たとえば指標というのは、離職率がどれくらいであるとか、経済状況がどうなっているとか、介護や福祉は充実しているかどうかというようなさまざまなマクロ変数と個人が感じる感情——いまどのくらい幸せですかというような感情ですね。こういった経験を統括させて一つの指標をつくりましょうという試みを行なっていました。

こういった試みは、いまいろいろな国で盛んでして、代表的なのはブータンです。みなさんもお存じかもしれませんが、ブータンは幸福の国といわれています。あれはみんながパラダイスみたいに暮らしているという意味ではなく、幸福度の指標を政府がつくって、それにあわせた政策決定などを行なっている。幸福をめざし、それを最も重要な指針としている国という意味です。ブータンのGNHであるとか、フランスやイギリスあるいはニュージーランド、オーストラリア、ドイツ、いろいろなところで、こうした幸福度の指標が盛んに議論されています。

しかし、これまでの幸福度指標は、マクロか個人のどちらかの一方に偏ることが多い多かったのです。たとえば経済学者さんがつくるとマクロの指標になりがちです。経済的な変数など客観的にとれるところから国の幸福を測定していきましょうというの

がマクロの考え方です。いっぽうで個人の気持ちが大事で、それぞれが幸福感を追いかけることが大事だというようにマイクロを重視するならば、マクロ変数のことは横に置いておいて、主観的に「あなたはどれくらい幸せですか。1 から 10 でお答えください」というような項目で調査をすればよいという話になるのです。

これらをどのように統合していったらよいのかということは、まだあまりちゃんとして解決の糸口がみえていないように思っています。まさに複雑系で、計算論やシミュレーションとうまく融合させて考えていかなければならない問題の一つだと思っています。

個人の幸福というのは、最近の研究から、じつは周りに伝播するということがわかっています。マクロというとても大きな日本社会みたいな話と、マイクロという個人のなかの話になるのですが、このあいだにソーシャル・インタラクションがあるのです。たとえば幸せな人が 1 人いると、その周りにもけっこう伝播をしていく。伝播をするというのか、あるいは類は友を呼ぶのかもしれませんが、とにかく全体的なマッピングをしてみると、幸せな人の周りに同じように幸せな人がいる確率が高いというわけです。

あるいは病気や肥満などにも同じようなデータが出ていて、肥満傾向のある人の周りには肥満になる人の確率が増える。肥満のケースはわかりやすいのです。つまり近くにいる人は、いっしょに食事をする機会など、同じような栄養価をとることがあるので伝播しやすい。行動習慣みたいなものが共有現実として発生したときに生じるマクロとマイクロのインタラクションがあるだろうといわれています。こうしたものも統合的に考える必要が出てきていて、これらの幸福の要素が実質的に統合可能か。あるいは逆に、統合しないほうが多様な現象を捉えられるのかどうか。いまじつはエンピリカル・クエスション (Empirical question) になっていて、はっきりとした解決があるわけではありません。

私たちは、こういったことをすこしでも解きほぐしていけないだろうかと考えていて、たとえば最近やっているのはマルチレベル分析というものをかなり使い込むようにしております。昨年度に行なった調査なのですが、日本のなかの 164 の集落、コミュニティに研究の目を移して、集落レベルの要因、つまりマクロ変数の要因と、そこに住んでいる住人の一人ひとりに取っているアンケート調査で、これは 3,500 人分の回答を得ました。つまり、一人ひとりがこの 164 集落にネストされていて、マクロの変数と個々人の変数のいずれが幸福感を統合的に予測するのかというモデルを立てられないかだろうかということです。

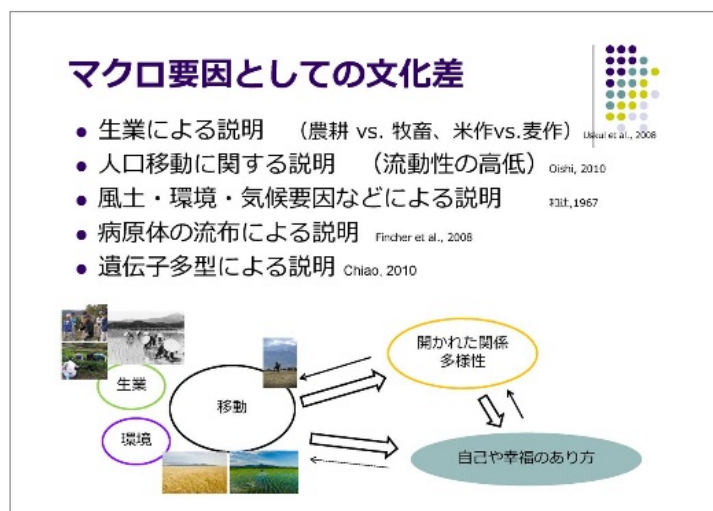
たとえば一人ひとりの幸福度というのは、もちろんその一人ひとりの社会関係、たとえばいろいろな人とつながっているかどうかであるとか、規範意識がきちんとあるか、自尊心がちゃんとあるか、自分が駄目だと思っていないかどうかとかなどのいわゆる「個人変数」と関連している。しかし、それだけではなく、その人が住んでいる集落レベルの要因、

たとえばその地域に小学生がたくさんいるかどうかというようなことがじつは影響している。

子どもが多いところに暮らしているということ自体が、なんらかのかたちで個人に、おそらく直接的ではないかもしれませんが、幸福感を促進するマクロ要因になっている。あるいは、自分の自尊心は低いかもしれないけれども、周りがみんな自尊心が高いようなところに住んでいると自分が幸福になる、恩恵を受けられる。自分はだめだと思っても、周りがちゃんとしていると結構うまくいくというような仕組みがここに生まれていることなどがわかってきています。

というわけで、このマクロ要因をこれからはきちんと検証する必要があるだろうということです。もちろん統計変数をつくっていくのですが、モデルを立てることがは簡単ではありません。ぜひ、いろいろな方の知識と知恵を結集して、うまい幸福度の指標がつくれたらなというのが、いま私がもっている夢、希望、目標です。

◇スライド7「マクロ要因としての文化差」



私の本業に帰ると、マクロ要因としての文化差をどう説明するのかということが大きな課題です。先ほど説明したように、日本とアメリカでは幸福感についての考え方が違っている。違っていることを出すということは、文化人類学あるいは文化心理学の関係でこれまでもたくさんあったのですが、なぜ違うのかということについては、まだまだ検討がなされていなかった部分があります。

これが最近では、いくつかの研究が出てくるようになっていて、たとえば生業の影響などが調べてられています。農耕と牧畜の違いであるとか、同じ農耕でも米と麦とで違うのではないかという研究が、『サイエンス』に昨年掲載されていましたが、ようするに米作地帯出身の人のほうが麦作地帯出身者より相互協調性が強いという結果になっていたりします。

あるいは人口移動に関する一面もあります。たとえばアメリカのように転職や引越しの回数の多いような世界、あるいはフロンティアみたいなかたちで移民がどんどんと入ってくるような社会の人のほうが、より抽象的な概念でいろいろなことを取りまとめていかなければならない。個別具体性というよりは、むしろ抽象性が重要になるし、パートナーの相手がどんどん変わっていく可能性があるので、自分をうまく売り込んでいくことが必要になる。パートナーに関してもよりよい相手を選択することが促進されるような社会になっていく。これが日本のように人口移動の頻度が少ないような社会になってくると、生まれたときから隣にいる人と仲良くするということが至上命題になっているので、自分をどう売り込むかということはそれほど重要ではない。むしろ周りの颜色を窺うほうが重要になってくるといことで、生存競争に関わる人口移動ということは重要ではないかというような指摘があったりします。

もちろん、昔からいわれているような風土や環境、気候要因の説明であったり、あるいは病原体の流布です。一つの研究では、いわゆる伝染病がかつて流行った地域、たとえばペストみたいなものが流行った地域のほうが、あとあと社会がより集団主義的になるという研究があったりします。伝染病を乗り越えようとする、私たちは規範的な行動をしなければならない。たとえばマスクを着けるとか、いろいろなことの処理をするとか、衛生的な環境を保つということは、規範行動が必要になってくる。病原菌がかつて流行って、そこから立ち上がろうと思うと、おそらくそういう規範行動をするようになって、そのことが社会としての堅さみたいなものをもたらしたのだらうという説明です。

もう一つは、もちろん遺伝子の多型みたいなものです。たとえばセロトニン・トランスポーター、日本人ではストレス脆弱性が高いといわれていて、アメリカではストレス脆弱性がどちらかという強い遺伝子多型をもっている。ストレス脆弱性が強い、つまり脆弱な人たちはそれを守る（buffer）ために、周りでみんなが協力するようになったのではないかという、こういう説明があります。ですから、どちらかというストレスに弱い遺伝子をもった人がつくっている社会のほうが、より集合主義的な暮らしをしているのではないかというのがこの説明です。

このようにいろいろな説明があって、どれが正しいのかということもいまいよくわかっていない状況なのです。いまのところ、データの堅そうだといわれているのが、上の二つです。生業と人口移動。この二つはもちろんお互いに絡みあっています。農耕すると移動しなくなるので、農耕社会のほうがもちろん人口移動率も低い。そういうところではより集合主義的な社会をつくりやすいというような説明がなされています。

日本というのは、集合主義的かつ人口移動率がどちらかといえば低い。たとえば転職率などを取ってみても低いですし、人生のなかで引っ越した回数を聞くと、アメリカ

などにくらべると低い社会です。こうしたなかで社会関係資本がいったいどのように培われているのかをこれまで検討してきました。

社会関係資本というものは、社会科学のなかでは重要視されている用語で、ソーシャル・キャピタル（Social Capital）といわれるのですが、つながりをキャピタルとして捉えてみようじゃないかという概念です。ロバート・パットナム（Robert David Putnam）が社会関係資本の有名なリーディング・リサーチャーですが、このように定義しています。「個人間のつながり、すなわち社会的なネットワークおよびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」。パットナムのモデルでいうと、どちらかという外にあるリソースとしてつながりは捉えられています。

物的資本や人的資本と同様に個人と集団の生産性に影響するという一方で、ソーシャル・キャピタルは私たちにとっては、外にあるマクロの要因です。たとえば、こういう会に出てきて、みなさんが仲良くしていて、いろいろなインタラクションをしていますという、これは私にとってソーシャル・キャピタルになるのです。ソーシャルキャピタルは場に帰属する要因でもあるし、私たち個人個人がコントロールしてコミットするものでもあります。

たとえば、ソーシャルキャピタルの恩恵を受けるために、私がもういちどそのソーシャル・キャピタルに参加をして、よりそれを促進しようとするれば、それは私の個人のなかのソーシャル・キャピタルにもなっていくのです。つまり、マイクロ、マクロという最初にたてた問題設定のなかの、インターフェースにあるものとしてのソーシャル・キャピタルというものを想定しています。

◇スライド9「日本の幸福→SCと農業社会」

日本の幸福→SCと農業社会



- 農業コミュニティにおけるSC研究
（「農をつなぐ仕事」創森社2012年）
- 農業普及指導員
 - 農業者に直接して、農業技術の指導・経営相談・農業に関する情報提供などを行う都道府県の職員
 - 2010年現在全国で約7,000名
- 地域ネットワークを支え、SCをつくるための職業的役割がスムーズにいくのはどのような時か？




ソーシャル・キャピタルというものが、いったいどのような機能をもっているのか。じっさいに現場のなかでどのように培われているのかを検討するために、農業という伝

統一的かつ流動性の低い日本的な社会のなかでこれはどのように維持されているのかを検討するような研究を私たちは行なってきました。

このときは農業普及指導員に着目をしました。みなさんにご存じでしょうか、普及指導員さんという都道府県の職員さんがおられます。基本的には農業者に関して、技術指導あるいは経営指導などを行なう方たちなのです。しておられることといえば、農家さんを一軒一軒まわって、じっさいに農家さんたちが集落営農をしたいといったら、それをつなぐような役割をしたり、あるいは法人化させたいというような話が出てきたときにそれを支援したり、個別具体的なことだけではなくて、地域ネットワークに関係するような事業もしておられるような職員さんです。

◇スライド 10「SC in Agriculture」



SC in Agriculture

- 農業においてSCは重要
 - 灌漑システム
 - 獣害対策: 集落ぐるみでの獣の追い払い(山端, 2010)
 - 行政主導事業(e.g., 農地・水・環境保全向上対策)の運用パフォーマンスに影響(星野, 2007; 中村他, 2010; 山下・星野, 2008)
 - 農業集落への定住(山口他, 2007)





農業においてソーシャル・キャピタルはどのように重要かということ、具体的なのですが、たとえば灌漑システムの維持です。用水路の整備であるとか、それを清潔に保つことは肝になっている。あるいは水問題です。いったん解決すると大丈夫なような気もするのですが、水問題というのはつねにトラブルの原因になっている。あっちに引いた、こっちに引いたとか、かつての水問題が集落間のトラブルとしていまだに根づいているというケースもかなりあります。こういった灌漑システム、用水路に対する対策であるとか、あるいは最近では獣害対策といわれるものです。鹿や猪などがやってくるのですが、一人ひとりの農家さんが個別に追い出しをしても、うまくいかないケースがほとんどです。集落全体でやらないと鹿などは逃げないのですね。

こうした集落ぐるみでの活動が必要になってきたり、あるいは誰かを受け入れて定住させるというときにも、集落ぐるみでの受け入れが必要になります。とくにソーシャル・キャピタルは、もちろんいろいろな社会で大事だと思うのですが、農業社会ではこういう具体的な事例として重要です。これをつないでいるのが普及指導員さんなのではないかということで、この人たちの働きに関心をもってみました。

◇スライド 11「Extension Officer and SC in community」、◇スライド 12「地域、人を結びつける『普及』の仕事」

Extension Officer and SC in community

- 普及指導員 (Extension officer)
 - 農業者に直に接して、農業技術の指導・経営相談・農業に関する情報提供などを行う都道府県の職員
 - 2010年現在全国で約7,000名
 - 1948年にアメリカの農業政策をモデルに導入



とある普及指導員さん

地域、人を結びつける「普及」の仕事

人と人の「ところ」をつないでいます
農業社会のコーディネーターです



近畿農政局普及課の職員さん
(2007年)

私たちが農業に素人だったので、普及指導員さんがどういう人か最初はわからなかったのです。こころの未来研究センターに私が着任する年くらいに、近畿農政局の普及課の職員さんがこころの未来研究センターができたということで来られて、「私たちは普及指導員さんをよくみているのだけれども、この人たちはじつは人と人の心をつないでいて、農業社会のコーディネーターをしているのではないかと思っている。」というお話を受けて、おもしろそうだなというところから話が発展しました。

◇スライド 13「『つなぐ』仕事」

「つなぐ」仕事

- スペシャリストかつコーディネーター
 - 例) **レンタカウ**: 限界集落の荒れた農地への獣害対策として牛の導入を提案
牛の世話などを通して、**コミュニティの活性化**
- 「地域連携」に関わる事業は、いろいろな問題の解決に効果を持つ
- 地域住民同士の「信頼感」向上は、地域の生活レベルの上昇と幸福につながる



たとえば普及指導員さんはなにをしているのかというと、「レンタカウ」をしています。レンタカーではなくてレンタカウ (cow)。限界集落があるなと思ったときに、そこに試験所から牛を連れてきて獣害対策のために入れるのです。これはなにをするかというと、牛はずっと草を勝手に食べてくれます。草がどんどん生えると猿などがやってくるのです。これを防ぐために、牛がいるとずっと草を食べてくれて大丈夫なのです。限界集落は、みんなが草刈りなどができないようなところなので、牛にしてもらう。かつ牛のよ

うな大型動物がいと、猿などは怯えて来なくなるのですね。

こういう効果があるということでレンタカウを入れるのですが、じつは普及員さんの狙いには裏のねらいもありました。牛がいるということは、じつはコミュニティにとって重要なのではないかということを考えられたのです。そのために普及員さんは妊娠している雌牛を連れてきました。その牛の子どもが生まれるのです。これは限界集落では一大イベントになって、集落の人たちがやってきて子牛の出産を見守るということがあって、そのあとも牛の世話のための交換日記みたいなものが発生するということが起こりました。

こうしたときに、「みんながつながりましょう」みたいなことだけを言ってもたぶんだめで、牛の世話をしましょうみたいな、明示的に、一見するとつながりとは関係がないような一種の「機能」「儀礼」が必要で、そこにつながりみたいなものが発生するというメカニズムをつくっているという事例でたいへんおもしろいと思いました。このあと、集落の人たちがあまりにも牛がかわいいので、牛を見るためのベンチを自分で手づくりをして、横にベンチを置いたら、お盆に帰ってきた小学生がそこに座って牛を眺め始めて、地域のコミュニティのステーションになるという話がありました。

◇スライド 14 『つなぐ』人の大切さ

こういうことを考えると、つなぐ人、なにかの取っかかりをもってきて地域のなかにつながりをつくる人の機能が大事なのではないか。橋渡しをするとか、信頼関係を築くというような役割を、こういう人たちが担っているのではないかと考えています。

「つなぐ」人の大切さ

- 不安を解消し、信頼関係を築くには？
- 「橋渡し」をする人(つなぎ手)の存在が効果あり



◇スライド 15 「Survey study」

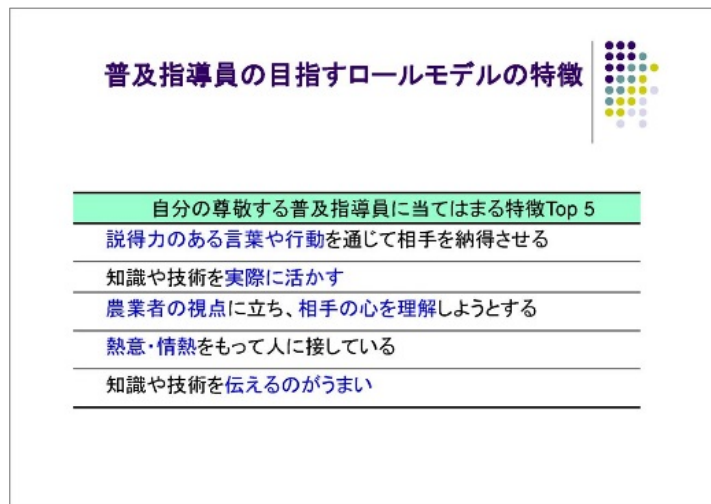
そこで私たちは、ほんとうにそうなののかを調べるために、こういうフィールド調査に加えて 4,355 名の普及指導員さんたちを対象に具体的な研究調査も行ないました。

Survey study

- 調査時期: 2010年9月上旬～10月下旬
- 調査対象: 全国47都道府県の普及指導員7,241名
- 有効回答数: 4,355名(有効回収率60.01%)

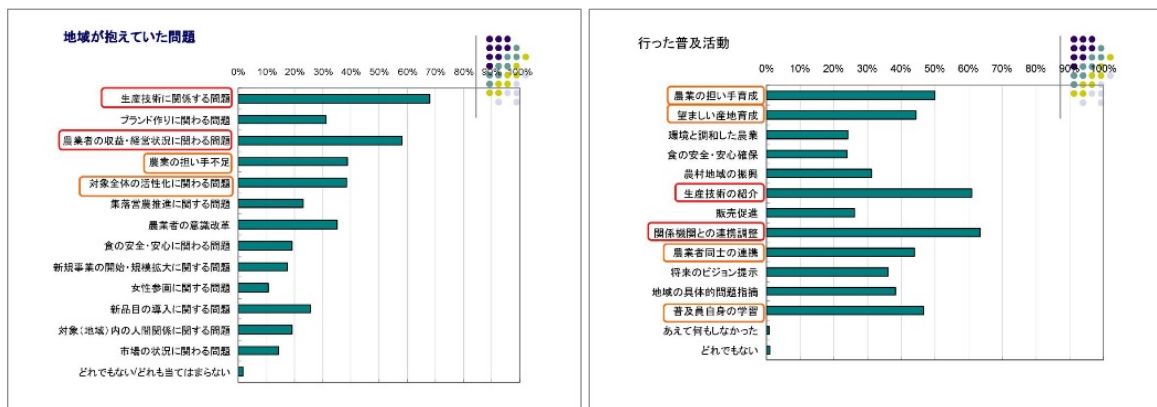


◇スライド 16「普及指導員の目指すロールモデルの特徴」



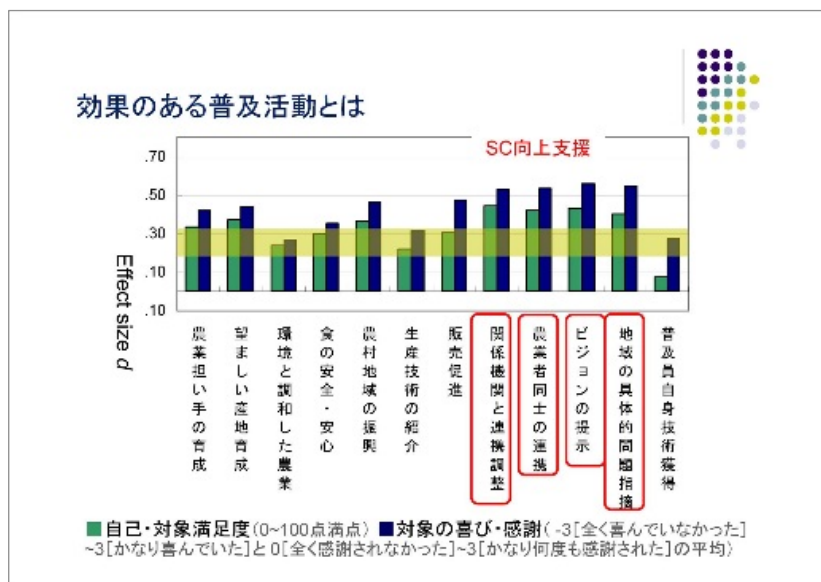
普及指導員さんがどういう人なのかを知るために、まずはめざすロールモデルを聞いています。どういう人を尊敬するかということを知っているのですが、説得力のあることばや行動を通じて相手を納得させるとか、農業者の視点に立っている人というように説得力のある思いやりの高い人というのがロールモデルになっています。

◇スライド 17「地域が抱えていた問題」、◇スライド 18「行なった普及活動」



その普及員さんにとって自分が担当している地域が抱えている問題というのは、生産技術に関係する問題とか、農業者の収益に関する問題が多いのですが、そういうときになにをしたのかと聞くと、普通は生産技術の紹介をするのです。ほかには関係機関との連携調整ということもあって、普及員さんはつなぐ仕事をしているので、行政の人に話をつけてきたり、JAの人に相談をしたりみたいなことをやります。

◇スライド 19「効果のある普及活動とは」



これがほんとうにどれくらいそれぞれ効果があるのかという効果量を検定しています。この下の軸にあるのが「なにをやったか」です。効果量が高いというのは、そのことに対してじっさいに喜ばれたとか、これは主観的な効果量なのですが、効果があったのかどうか。つまり、農業の担い手の育成をした人に比べて、しなかった人のほうが効果が出にくかったかどうかということを調べているのが効果量です。

これをみてみると、じっさいに効果のある普及活動というのは、関係機関との連携調整とか、農業者同士の連携とか、つながりをつくるような普及活動をしたときに、じっさいに農業地にとって効果がある支援が行なわれていたということがわかります。不思議なことに、生産技術の紹介というのは効果量が低いのです。

これも同じようなことで、普及員さんは、技術をもった人ですということで農業地域に入ります。これは重要なツールなのです。これがなければ普及員さんはなにをしている人なのかかわからないので、農業地域には受け入れられません。ですが、じっさいに効果をもっているのはその人たちが伝授している生産技術の紹介そのものではなく、むしろその人たちがしている関係機関との連携調整みたいなことが効いてくる。

ストレートではないことが、なんらかの効果をもたらすということに発展しているのではないかと思います。つながりが必要だったら、つながりをつくる人が来ればよいと思うのですが、そういうわけではない。むしろ、違うファンクションをもった人がやってきて、たとえばさっきのレンタカウの牛みたいなものがやってきて、そこに新たなものが生まれるというメカニズムを検討することこそが、これからの社会のなかで複雑な幸福みたいなものを検討するうえで重要なのではないだろうか和私たちはいま考えています。

◇スライド 20「地域の幸福 (on-going research)」

多世代での文化伝達・維持というものがどのように地域のなかで行なわれているのか。これもマクロに起こっている環境要因と、個人がどのようにそれに対してコミットしているのかを両方からみていこうかなと。そこに普及指導員さんのような媒介者のようなものが、どのような効果をもたらしているのかを検討したい。

外からみた魅力となかの人の幸福を支え

る柱は、かなり違っている。たとえば、いまは地域の幸福は大事だといわれているのですが、「この地域ではこれが大事だ」とその人たちが思っていることと、そこを訪れた人が感じることはかなり違って、このギャップみたいなもののなかから新しい価値観が創成されないだろうかというようなことも考えています。つまり第三者の目の大切さということで、自分たちのなかにいると気がつかないようなマクロ・ファンクションが外の人たちからはみえるということがあるのではないだろうか。ということで、最終的にはマクロ環境と個人要因の相互作用を解明していきたいと考えています。ご清聴ありがとうございました。

地域の幸福(on-going research)

- 多世代での文化伝達・維持の重要性
- 外から見た魅力と中の人の幸福を支える柱は異なる
- 第三者の目の大切さ: 外との交流型SCがもたらす地域への愛着と幸福
- マクロ環境と個人要因の相互作用を解明する

西●ありがとうございました。みなさまから質問などはありませんか。

A氏●これはまさに津田一郎さんが先ほどお話しされた「第二種自己組織化」の現代版というか、ソーシャル版だと思いながらお話をうかがっていました。

マクロでもなくてミクロでもなくて、しかも直接因子をもちこむのではなくて、ぜんぜん違うレンタカウをもちこむことによってまったく新しい社会性が生まれる。津田さんは、お医者さんと協力してネットワーク・ディジーズあるいはシステム・ディジーズということをおっしゃっていましたが、これはネットワーク・ハピネス、あるいはシステム・ハピネスですね。

もう一つの観点からいくと、内海健先生と昨日の三輪敬之先生の自閉症のお話もあって、個人ベースでみると自閉症の症状が顕著なのですが、西先生の共同研究の成果で、人との交わりが入ると自閉症の症状が緩和されるという話も出ていました。きょうの3演題と昨日の演題はすべてつながるというように思います。

これまではハンス・セリエ (Hans Selye) の影響があまりにも強すぎて、私たちの感情は怒りや恐怖が研究対象の中心だったのですが、時代の流れが変わってきてハピネスが

とても重要視されている。経済成長が著しいにもかかわらず、ハピネスがなかなか進んでいないということは、すごくタイムリーな共時性を感じるのです。

この研究会の全体が、私のあたまのなかではぜんぶつながって、すごくハピネスなのです。内田先生からもコメントなどがあれば、いただきたいなと。

内田●共時性ということをおうかがいして、おもしろいなと思ったのですが、心理学の歴史のなかでもネガティブ・エモーション（負の感情）というものがずっと重要視されてきたのですね。それは対処しなければならないものとしてのネガティブエモーションだったと思うのです。そのいっぽうで、人が幸せになる社会をみんながつくろうとしているのにもかかわらず、なにがその要因となっているのかという検討はそれほど長くされてきたわけではない。もちろん哲学的な議論はあるのですが、解析みたいなレベルできていたのかというと、そこがおろそかになっていた面がある。

ポジティブとネガティブは両面なので、ポジティブだけに走ると逆にネガティブへの対処を忘れてしまうので、たとえば私は幸福感の研究をしながら、いっぽうでニートと引きこもりの研究をしたりしているのです。それは裏表の問題だと考え始めているのです。裏表であるということを考えると、そのなかにみえてくる。なにがファクターになっているのか。なぜ、幸福というものが日本のなかでも重要視されているいっぽうで、ニートとか引きこもりの若者が増えているのかという両面からいまの社会を読み解けないだろうかと考えています。

B氏●農村というのは最先端の問題ではないかと思うのですが、逆に大学における教育と先生の幸福度。これはクリティカルな問題で、いまの大学に欠けているものはなにかといたら、けっきょくはつながりです。大学は教員と学生から成る共同体である。その共同体のもっているハピネスが大事なものではないかと私は思うのです。いま重要な課題になっている限界集落の問題は、そのまま大学の問題に転換されてしまうような感じがするのです。これは直観で、どうつながっているのかは、いまはなんともいえないのですが。

たくさんの若者と先生がいるような社会とお年寄りしかいない限界集落、この二つのあいだの落差は、ぜんぜん違うものでまったく逆のような感じがするのですが、この二つはじつはものすごくつながっているように思うのです。直感的でうまく説明できないのですが、「大学は幸せか」というようなことをいいたいのですが、共同体としての大学はいったいどうなの。マクロのほうでは、共同体としての大きさということをおっしゃっておられると思うのです。そういうようなものをどう考えられますかということをお聞きしたいのです。

内田●重要な問題だと思います。いま企業の調査などはいろいろとやっているのですが、企業というのは最近では理念が強くなってきて、従業員それぞれが幸せであることみたいなことが強くいわれるようになってきたのですが、大学はそのような話が出てこない場所の一つだろうと思うのです。かつ共同体という意識についても、どちらかというと低い。個人がそれぞれで業績を伸ばすためのリソースみたいなものを大学から取って、それをまた還元すればそれでよいという感じになっているのではないかと思います。

しかしこれでは最終的にはなんらかのパフォーマンスそのものを落とす可能性があるかもしれない。かつては大学は議論の場であり、コンソーシアムであったりコミュニティという要素があったと思うのですが、最近の大学が場の性質を失ったような環境にあるとすれば、これは見直していくべき点だろうと思います。

かつて私は、准教授くらいまでの若手研究者を対象に、京大の学内で幸福感に関する調査をしたことがあります。なにが幸福をもたらしているのかという変数をいろいろとみてみると、業績の数などよりも、むしろ研究室の人との関係の良さが幸福に寄与していた。あとはドクター1、2年目の学生にちゃんとした人がいるかどうかというような結果も得られていました。D1くらいというのは、うまく学部生と先生とのあいだに立って来て、まさに普及員さんみたいな役割を取っている可能性がある。こういう人がちゃんという研究室はうまく回っていて、そういうところにいる人はのびのびとパフォーマンスを発揮できているのかもしれない。

こうしたことを私もいろいろな社会のファンクションのなかで援用していきたいと思っています。まさに集落と大学という異なる組織で、実はパラレルな問題が発生しているような気がします。「限界大学」とならないようにしなくてはならないですね。

C氏●聞き落としたかもしれないのですが、幸福度ということで、人は、お年寄りから子どもから、障害のある人から、女性から、いろいろいますよね。多様な人から成る人の幸福度はどう導かれるのですか。

内田●多様性をどのように検討するかということですか。

C氏●はい。それと多様性をどのように持続するのかということと二つ聞きたいのです。幸福をずっと持続していくと最後に出てきたのですが、多世代共生といった場合には大きなポイントになると思うのです。それはどのような仕掛けというか、失われるもののほうが、幸福を論じる場合には大事だと思うのですが、そこはどのようにされるのですか。

内田●基本的には大規模調査だと、性別と年齢別のクラスタに分けて、なにが要因になっているのかということを検討することだろうと思います。たんなる平均値の比較だと、普通にやると 30 代と 40 代の男の人がいちばん不幸とでてくる調査が多いです。しかし平均値の比較だけではなくて、そういう人たちはどういうときに幸せを感じているのかを知る必要がああ利増す。たぶん 30 代、40 代の人の幸せと 20 代の女の子の幸せは、おそらく原因が違おうだろうということで、それぞれのクラスタごとに予測因がどうなっているのかを分類する作業をいちばん重要視してやっています。そのためには大規模なサンプルが必要になるのですが。

あとはその人たちの相互交流ですよ。たとえば、世間がぜんぶ 30 代、40 代の男性みたいな幸福の追求をしていると、それでよいのかというたとぶんそうではないのです。だから、いろいろな幸福感をもった人たちが、一定層のレベルでいろいろな割合で集まっている社会というのが持続可能な社会なのではないかということで、これからの人口問題とも関係して検討しなければならない課題だと思っています。

D 氏●とてもおもしろかったです。ミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi) がしているエクスペリエンス・サンプリング・メソッド (Experience sampling method) などのいうハピネスは、評価関数としてサンプリングで決まるというのが前提じゃないですか。ぼくはハピネスって、社会依存性とか文化依存性を考えていると、なにかある視点を学習するというかアダプティブなところがそうだと思うのです。

だから、アレクサンドル・ソルジェニーツィン (Alexandr Isaevich Solzhenitsyn) の『イワン・デニーソヴィチの一日』というのがすごく好きで、それは強制収容所に入っているデニーソヴィチという人が朝から晩までこき使われているのですが、ものすごい幸せを感じているのです。

だから、うまくいえないけど、幸福研究って、プライマリー (primary) には各時点における幸福って、プライマリーには各時点における幸福という評価関数、スカラー関数かどうかはわからないけれども、それを調べるというアプローチでよいと思うのです。しかし、すごいつらいと思った時期がふりかえったら幸せに感じられるとか、チクセントミハイはフローの研究の動機で、どんな状況でもなにか幸せそうな人があるというような話があるじゃないですか。

そういうことを考えると、ものすごいラーニングだとかアダプテーションとか、あるいは発見、そういう視点が幸福研究には必要だと感じています。そのときには日米の文化差が、固定的なものではなくプリンシプルな、つねにボールディングなものとしていかに捉えられるかということに関心があるのです。そのあたりはどうなのでしょう。

内田●それは重要な視点で、幸福というのはスタティックなものではなくてダイナミックだし、プロスペクトだったり将来予測みたいなものが関係している。さきほど紹介した日本だと7割くらい幸せだということがちょうどよいと思っているというのは、そこにある種のプロスペクトが存在して、かつそれと過去に関する経験みたいなものが存在するから、それが落としどころとして出てくるのです。

経験学習といまの時点で感じる幸福というのは、相関関係をもっている。それを反映させながらやっていくと、たとえば文化交流が起こったときにプロスペクト自体の変数が変わるということを考慮していかなければならない。いまそれは欠けている視点の一つなのですが、そのようなところに切り込んでいきたいなと思っています。

E氏●似たような話もありましたが、うまく言えないのですが、幸せを指標化することはいかなることかと。痛みとかつらさは指標にするような気にはならない。幸せだけ指標にする。しかも、内田さんは研究者としてそれを追求する。幸福研究はすごく大事、幸福とはなにかという、それを指標する。それを国が審議会でやる。そういうことをよしとする、しかも世界的にいろいろな国がそういうことをやっている。そういうことがもたらす知というのは、文明とか文化からみて、さきほど先生がおっしゃったダイナミックなものでいくと、けっきょく突き詰めたら内面に、先生が区別されているミクロのほうに行くのかなと。

内田●幸福という概念のなかに、たぶんいろいろなことが入り込んでいるのです。たとえば、痛みということも逆にいうと含まれている。痛みみたいなものの反転として幸福というものを考えているので、幸福というのはたぶん幸福そのものではなくて、まさに包括的な意味での幸福になっている。突き詰めると、個人が感じている感情経験みたいになっていくかもしれませんが、それだけを指標にしてしまうと次の予測はできませんよね。

E氏●とくに言いたかったのは、指標化して安心するというわれわれはいいかなるものかなと。なんでもかんでもそうですから。

内田●指標化して安心してしまうのはよくないですよ。指標というものは安心のために使うのではなくて、将来予測と原因理解のために使わなければならない。

E氏●そうですね。でも、国が「うちの国はこういう指標だ」と使うのでしょうか。たとえば政策には使うのでしょうかね。

内田●それで日本も 2013 年に終わってしまったのですよね。それは政権交代とともに終わったのですが、それを基礎研究として、それを使ってくれるかどうかはまだわからないのですが、どういう要因が不幸せなり幸福感をもたらしたかという要因分析みたいなものは、かならずフィードバックをしないといけないと思います。

国レベルでは、もしかしたら難しいかもしれないと思い始めて、いまはどちらかというと、市町村とか地域レベルでは指標を活かしていく動きがあります。

E 氏●指標づくりをすると同時に、それが使われたときに、それを破壊する。ディストラクションが同時に仕込まれているような指標づくり。つまり、これをそのまましてしまうと、これはどこかで詰まってしまうという自爆装置をどこかでつけておかなくてはならない。それは個人的な要因に入れたらだめになるように……。

内田●幸せにするために指標ですよみたいになってしまうと、うまくいかないような気がしています。起爆装置ではないのですが、内部的にそれを見直すことができ、しかもそれを改変してアップデートできるような仕組みになっていかないといけない。それを組み立てるには、あるていど時間が必要だし専門家がちゃんと入らないといけないのですが、不可能ではないのではないかと個人的な夢、希望のレベルですが思っています。

E 氏●それがこのテーマの創造的、破壊的という。

内田●そうですね。たくさんご質問いただきありがとうございました。